

# 森田志保、 第19回河上鈴子 スペイン舞踊賞を 受賞!



『はな10』より(撮影/北澤壮太)

二年に一度の顕彰、河上鈴子スペイン舞踊賞(その第19回)は、人気バイラオーラの森田志保が受賞した。

永年さまざまなシーンで精力的に活躍する森田だが、今回は主に創作公演『はな』シリーズの舞踊芸術としての確固たるクオリティが評価されての受

賞となった。一見難解そうな舞台でありながら、一度観た者はその癒しに充ちた不思議な世界観や勇気を促す圧倒的なフラメンコのリピーターになってしまう、森田志保の代名詞とも云える『はな』。かつて彼女はこのシリーズで文化庁芸術祭賞を受賞している。

河上鈴子スペイン舞踊賞受賞の知らせを受けた森田志保はこう語る。

「鬱々としたニュースばかり流れる中、ずっと光が差し込むような受賞のお知らせ、ありがとうございます。

運に恵まれてここまで来ました。賞をいただけて思うことは、これを還元していかなければ、という思いです。

よく考えるのは、自分がやるべきことのメッセージは常に天からシャワーの様に降り注いでいて、でも、ちゃんとアンテナ立てていなかったり、感覚を研ぎ澄ませて生きていないから、キャッチできていないのではないかと、そ

れを確信を持って受け止めたい。この生の役割を知りたいということです」

受賞の主な理由となった『はな』シリーズは、森田志保の中でどのような位置付けなのだろうか？

「昨年12月の公演で『はな』10回を数えました。やりたいことを、やらずにはいられないことを、やり続けてきました。だんだん回を重ねる毎にハードルも上がるし、自分へのハードルも上がるし、続けていく難しさも知ります。

ずっと、amor y pena をフラメンコとフラメンコだけでは表現できない部分を別な表現を用いつつ、作品にしてきました。カタチは変われど、テーマにしていることは同じ。『はな10』で、このシリーズは一区切りかな、と思っています。作品はフラメンコを超えられないのでは、という思いもあります。ただ先のことはわかりません。思いがけない受賞を、素直によるこびたいです」



## 「河上鈴子スペイン舞踊賞」 について

以下は一般社団法人現代舞踊協会制定河上鈴子スペイン舞踊賞の選考規定。

**【趣旨】**わが国の舞踊文化に大きな功績を残された当協会、第五代会長・故河上鈴子の基金により昭和63年(1988年)に制定。河上鈴子の功績を記念するとともに、スペイン舞踊の分野で優れた業績を挙げた者を顕彰することにより、スペイン舞踊の発展に寄与することを目的とする。

**【対象】**◆対象期間は、当該年の1月1日より翌年12月31日までの2年間とする。(今回の授賞対象は2018年1月～2019年12月)◆対象者は2年間を通じ優れたスペイン舞踊作品を発表した個人または団体で、過去の実績を加味し選出される。協会員以外も対象とする。◆「河上鈴子スペイン舞踊賞」の既受賞者への受賞は行わない。◆対象作品は、各自リサイタル、協会主催合同公演の発表作品等とし、発表の初演・再演は問わない。

**【件数】**受賞件数は1件を原則とする。受賞すべき対象がない場合は、当該年の授賞を行わない。

**【選考委員会】**理事会選定により、舞踊家、舞踊評論家、学識経験者等、7名前後の選考委員により選考委員会を設置し選考にあたる。選考委員会は当該年の翌月1月に開催する。

**【決定】**授賞候補選出は選考委員会において、選考委員の過半数の推薦を必要とする。選考委員会は選考結果を理事会に報告し、承認を経て決定する。

**【授賞】**授賞者に、賞状、賞牌、副賞30万円を授与する。授与は、一般社団法人現代舞踊協会総会後の懇親会授与式にて行う。

### ★過去の授賞者リスト

第1回	1989年	岡田昌己
第2回	1990年	小島章司
第3回	1991年	小松原庸子
第4回	1992年	佐藤桂子・山崎泰
第5回	1993年	山田恵子
第6回	1994年	碓山奈奈
第7回	1995年	該当者なし
第8回	1996～1997年	該当者なし
第9回	1998～1999年	小林伴子
第10回	2000～2001年	蘭このみ
第11回	2002～2003年	鍵田真由美・佐藤浩希
第12回	2004～2005年	該当者なし
第13回	2006～2007年	該当者なし
第14回	2008～2009年	曾我辺靖子
第15回	2010～2011年	該当者なし
第16回	2012～2013年	高野美智子
第17回	2014～2015年	石井智子
第18回	2016～2017年	平富恵
第19回	2018～2019年	森田志保
第20回	2020～2021年	?



カステネットで踊る全盛期の河上鈴子  
(撮影者不明ですが、マエストラの想い出に掲載させていただきます)

賞の冠たる河上鈴子(1902～1988)は、大正・昭和期に大活躍した舞踊家。現代舞踊協会の名誉会長であり、主な受賞歴は、舞踊ペンクラブ賞(1958)、舞踊芸術賞(1966)、紫綬褒章(1967)、勲四等宝冠章(1973)、舞踊批評家協会賞(1977)、芸能功労者表彰(1978)、スペイン・メリトシビル民間功労大十字章(1985)など多彩。東京に生まれ4歳で上海に渡りバレエを始め18歳でプロに。22歳で渡米、世界各地で公演。アメリカの一流劇場でスターとして迎えられた当時、大学出の月給が100ドルの頃、彼女の週給は350ドルだったという。昭和4年帰国以降、日本劇場附属音楽舞踊学校の舞踊主任教授ほか、洋舞界のバイオニアとして大きな功績を残した。

これまではスペイン舞踊作品の劇場公演に与えられるというイメージが強い本賞だったが、今回の森田志保の受賞は、小劇場かつフラメンコ度の高い作品も大いに注目されることの契機となってくれた。前回より選考委員を担当し始め、「スペイン舞踊」を「フラメンコ」と捉えても問題ない顕彰だと改めて認識した。ファンタスティックで自由奔放な鈴子先生の生き様を反映するかのような、委員それぞれが付度抜きで発言できる選考会の闊達な空気は好ましく、二年に一度の選考会を楽しみしている。

「過去の実績を加味し選出」という形態はスペイン舞踊・フラメンコには唯一の顕彰であり、この賞自体のステータスは年々高まってゆくだろう。選考

の公平性・妥当性を高めることは、この顕彰事業の一層の深化発展に有益と思えるので、スペイン舞踊やフラメンコの公演を観る機会はそう多くはない選考委員の方々に、今年から各公演主催者の方々に選考委員の取材招待を働きかけることにした。優れた舞踊手をコンスタントに輩出し続けるフラメンコ界にとって、さらにこの賞が身近でかつ輝かしい顕彰になって行くこと、ひいてはそれが舞踊芸術の底上げに直結してゆくことを願う。これを機に、現在の隔年授賞からかつての毎年授賞への移行についても積極的に提案してゆくつもりだ。

(本誌編集長/小山雄二)



河上鈴子(写真提供/一般社団法人現代舞踊協会)